
雪

春月桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪

【Nコード】

N5173C

【作者名】

春月桜

【あらすじ】

主人公の雪道^{ゆきみち}雲^{みぞれ}の中学校に転校生がやってきた…

第1話

雪

1、紹介

私は、ゆきみち雪道みぞれ霽。

目はちよつとだけ茶色が混ざっていて、髪の毛は後に一つで結んで、ポニーテール。

黒髪に、ちよつと茶髪がある。

バリバリ日本人です。

私は女なのに、ロマンチックなことなんか考えたことがない。

女の子はみんな普通は好きな人とか、かっこいい人とか、女の子ってなにかしら可愛いことを考えるのに、私は今にもなって、好きな人なんてできない。

まあ、言葉をもつと簡単な言葉でいったら、「恋に鈍感」っていうやつよ。

そんな私は今中学二年生…つらい。

中学二年にもなって彼氏がないのは、私ともう一人だけ、その人は学年トップの成績の皐月さつき 由梨矢ゆりやという子、近づきがたいオー

ラを感じる子。

みんな友達を見ていると男とイチャイチャ、すっごくムカつく。

でも、結局は私が鈍感なだけ。

みんなをせめちゃいけない。

私も、彼氏がほしいと思う。

でも、好きになれるやつがない。

みんなつまんないんだもん。

多分、私の好きになる人はハードルが高い。

この世に、私の好きな人なんていない。

そう、私は思う。

2、転校生?! 何故こんな時期に?

キンコンカンコン...

一時間目の始まりのチャイムがなった。

ガラッ

教室のドアが開いた。

そして、先生が入ってきた。先生が…

「おはよー。」

先生は大きな声で挨拶をしてくる。

そして、クラス全員がかえしてくる。

ここまでは、いつもと同じ、だけど、次からいつもと全然違う話をされる。

「今日は転校生がきているー。」

先生が笑顔で言った。

「先生、それは、男ですか、女ですか!!」

一人の男子が立って先生に聞いた。

「それは、入ってからの楽しみ。さあ、入って来い。」

先生は呼んだ。

ガラッ

教室のドアが開いた。

スタッスタッスタッ…

『きゃー!!!』

女の子の私と皐月さん以外みんな声をあげた。

「うるさいぞー。」

先生が注意した。

（だれでもいいのかよ？）

私は心の中で女子達に言っていた。

「桜杉^{さくらぎ} 厚樹^{あつぎ}です。よろしく願いします。」

桜杉君はかつこいいけど何か物足りない気がする。

私は目が一瞬だけ、合った気がする。

（何か…彼女いそうだな。）

私は心の中でちょっとだけがっかりした。

「じゃあ、雪道の後だな。わからないことがあったら雪道か、隣のやつにきけ。」

先生は桜杉君に笑って言った。

「はい。」

スタスタスタスタ…

ガタツ…

「かつこよくない？」

女の子二人が話していた。

「うん、超好み。」

それを、桜杉君が聞いていたみたいで笑った。

私はゾクツとした。

（今、冬なのに、こんなときに引っ越してくる人っているんだ？）

私はそう心の中で思った。

キンコンカーンコン…

行間休みになった。

女の子たちが一斉に桜杉君のほうにきた。

私は押しつぶされそうになった。

はあー。

「くすくす。」

「ん？」

どっからか笑っている声が聞こえてくる、見渡したら、皐月さんが笑っていた。

「な、何で笑ってるの？」

私は皐月さんに聞いた。

「だって、押し出されて、ため息つくんですもの。くすくす。」

皐月さんは見たことのない笑顔で笑ってくれた。

「ねえねえ、私、皐月さんのこと由梨矢ってよんでいい？」

私は聞いた。

「え？、あ、うん、いいけど。」

由梨矢は笑顔で言ってくれた。

「じゃあ、私のこと囊って呼んで。」

私は元気に笑顔で言った。

「うん。」

由梨矢は嬉しそうな顔をして言った。

私は自分の席に戻るのはいやだから、図書室に行くことにした。

ガラッ

教室のドアを開けた。

ピシヤッ

ドアを閉めた。

すたすたすたすた…

真っ直ぐいつて七番目の教室が図書室だ。

あいかわらず静かで、でも、さみしくない。

だって、本がいっぱいあるから。

私はよく、図書室に来ることが多い。

ガラッあまり人がいないのに、図書室のドアが開いた。

私はふりむくと桜杉君がいた。

「え？ 何で？」

私は人が少ないのに何でここにいるのか、気になった。

「別に、ただきただけだよ。」

桜杉君はニコツとしていつてきた。

「図書室よくくるの?」

桜杉君は私に聞いてきた。

「うん。本って読んできると落ち着くし、いろんな世界につれていってくれるじゃない? 私はそこが好き。」

私は本を手に取りながら言った。

「ふーん、なんかロマンチックだね?」

桜杉君は椅子に座りながら言った。

「そうかな? 私はロマンチックなことなんて何も言えないから、そうゆうのに鈍感なの。」

私は本ながめてどれにしようか悩みながら言った。

「意外とロマンチックだったりしそうだね? 見てる限りでは。」

桜杉君は本をとって言った。

「桜杉君って…」

私が言いかけた。

「厚樹でいいよ?」

桜杉君は本を読みながら言った。

「厚樹ってさ、彼女とかいそうだね。」

私は大胆のもほどがあるってぐらい恥ずかしいことを言ったことを今思った。

カー

顔が熱くなった。

「くすくす。いないよ？ 彼女なんて。女ってチヨロイよな。」

私は厚樹から出てきた言葉が力チンときた。

「どうゆうことよ？」

「だから、女なんて簡単にひっかかるから、暇つぶしにはいいんだよ。」

バンッ

私は思いつきり厚樹の頬をたたいた。

「いつてー、なにすんだよ！」

厚樹はむきになって怒った。

「最低よ。あんたからそんな言葉が出るなんて信じらんない！！女を暇つぶしにつかうなんて、最低！！」

私は言っただけ言って出てってしまった。

「何だ？ あいつ。」

厚樹は叩かれた頬をなでながらつぶやいた。

何故かくやしい。

見透かされたみたいで。

私は頭に手をかざしながら、涙目をかくした。

ガラッ

私は教室のドアを開けた。

私は泣きそうになりながら、自分の席に座った。

「ねえ、ねえ、桜杉君知らない？」

一人の女の子が私に問いかけた。

（何で私があいつのこととしてなくちゃいけないのよー！）

私は腹をたてながら、言った。

「図書室にいたよ。」

私は我慢しながら、笑顔で言った。

「ありがとうございます。」

一人の女の子はすごく喜んで言った。

「あいつのどこがいいの？」

私は聞いてみた。

「え？ どこって、かっこいいじゃないですか。クールで、優しく、ノリがよくて。」

女の子はいかにも、「桜杉君が好き。」と言ってるような恋します顔で、返してきた。

「ふーん。案外ひどい人だったりして…。」

私はつい本音を言ってしまった。

「そんなひどいなんて。」

女の子は悲しそうな目をしながら、私に怒ったような口調で言ってきた。

「うそだようそ。」

私はヤバッと思いながら賢明に嘘のことを言った。

「嚢、ちょっとつきあって。」

私は由梨矢に無理矢理腕をつかまれて引きずられながら、教室を出た。

「霰、あなたあの言った言葉本気でしよう？」

由梨矢はちよつと真剣な目になって、話しかけてきた。

「え？ 何で？」

私は何も言えなくなると思い必死にこの言葉を出した。

「霰、このことは誰にも話さないでおこうと思ってたんだけど…仕方ない。」

私は由梨矢から話を聞いた。

「うそでしょ?!」

私は大声をあげてしまった。

「しー!!」

由梨矢は指を立てて口にあてた。

「あ、ごめん。でも、本当?! 由梨矢と厚樹がつきあってたって?」

私は思わず聞いてしまった。

「うん。全部本当の話。」

由梨矢はうつむいて、思い出すように話はじめた。

「私達はつきあって、みんなに言われたわ。何であんな地味な女として、みんなに言われた。私はそれが怖くて、死のうとも思ったこともあるほど女は怖いって思った。私は、でも、厚樹が好きだった。いつも、みんなに好かれて、青春真っ盛りって感じて、私があこがれてた。でも、告白されたときはびっくりした。だって、考えてみなよ、私があこがれてるやつに告白されたんだよ？。思った以上の驚きだった。でも、ある日聞いてしまったの、私はいつものように教室の前に来た。ここまではいつもと同じだった、でも、何故かその日はちがかった。」

「あんなの好きなの？厚樹って、嘘でしょ？」

女の子達が厚樹の話しかけたみたいで、

「んなわけないじゃん、あんな地味なの本当の好きになるわけないじゃん。あはははは。」

厚樹は笑いながら軽く言ったわ。そう聞いたとき私は泣いたわ。くるしくて。それから私は恋をしなくなったわ。また、だまされるんじゃないかって。だから、私のことを本当の好きになってくれる人に出会ったら、付き合うことにしてるの。」

由梨矢は遠くを見るような目で、空を見上げた。

「でも、すごいわね囊。」

由梨矢は笑顔で私に言ってきた。

「何が？」

私は何がかわからなくて聞いてみた。

「初めてでわかつちやうなんて。」

由梨矢は苦しそうな声で私に言ってきた。

「さっき私いなかったでしょ？」

「うん。」

「そのときにあの厚樹にあったのよ。ひどい言葉をきいたわ。女は軽いつて、暇つぶしにはちやうどいいつて。」

私はムカつきながらも言った。

「どこで聞いたの？」

由梨矢はたずねてきた。

「え、図書室だよ。それが何か？」

私はポカンとした顔で聞いた。

「ううん。なんとなく。」

由梨矢は隠しているような顔で言った。

「ふーん。でさ、何で。前から、知ってんの？厚樹のこと。引っ越してきたんでしょ？」

私は首をかしげながら聞いた。

「え？ 一年のときにここにいたのよ。それで、知ってんの。」

由梨矢はちよつとだけ笑みをこぼして言った。

「ふーん。」

私はちよつと小さくなって言った。

「そうか、厚樹がそんなこと言ってたんだ。」

由梨矢は苦しそうな顔をしていた。

「私は絶対にあいつを信じない。」

「え？ 私そこまで言ってないよ。」

由梨矢はびつくりした顔で、言った。

「うん。由梨矢のせいじゃないよ。私が勝手に決めたこと。ずっと、由梨矢を信じてるよ。」

由梨矢は泣きそうになった。

「泣かないでよーあははは。」

私は少しだけからかった。

「だって、だって、霰がー…」

「あははは。」

こうして、ちょっとだけ大人の時間を過ぎていったのでした。

ガラッ

私達は教室に入った。

視線は一気に私達のほうに向かってきた。

「え？ 何？」

私はみんなを見ながら言った。

「ちょっと、裏こっちにきてくれない？」

女の子たちが集団で私のことを呼びかけてきた。

「え？ いいけど。」

私は一瞬ゾクッとしてしまった。

ガラッ・ピシャッ

「ちょっと、何すんのよ、やめて、いたっ、何すんのよ！！！。」

びくっ

（何？）

くすくす。

「なんなの？ 何で笑ってるの？ 厚樹。」

由梨矢は怖がりながら聞いた。

「ん？ 何でつてたのしいから。女って面白いよなあんな単純なことであんなことするんだもん。くすくす。」

厚樹は笑いながら言った。

「何て言ったの？ あの子達に。」

由梨矢はおそろおそろ言った。

「あいつにぶたれたって言ったんだよ。そしたら、「私達で厚樹君を守る！」とか言っちゃってさ。あんなことになってるの。面白いじゃん。」

厚樹は笑いをこらえながら言った。

「え？ ぶつたの？ 雲が？」

由梨矢はびつくりした顔で言った。

「ああ、ほら、後。赤くなってるだろ。」

厚樹は左の頬を指差しながら言った。

本当に赤くなっていた。

「痛いってば!!」

廊下から大きい声が聞こえてきた。

「嚢…。やめさせて、今すぐ。」

由梨矢はこぶしを握り締めて言った。

「へー。根性少しはよくなったじゃん。前とはちがって。おい、みんなこっちの方もいたぶってほしいってよー。」

厚樹は笑みをこぼしながら言った。

「はい。おとなしくしてろよ!!」

ガンッ

ガラッ

「どの方がいたぶってほしいの?」

一人の女子が言った。

「この人。」

厚樹は由梨矢のほうを指差した。

「へー。学年トップの学力だからっていい人ぶってると痛い目みるんだよ?」

一人の女子が棒ふりおろした。

ガツッ

音がした。

「え?」

バタッ

倒れた・・・震が・・・

第2話

第2話

「嘘だろ？」

様子を見ていた男子が一人腰をぬかした。

「え？マジ？頭から血出てんじゃん。」

男の子がもう一人言った。

『きゃー！ー！』

女の子達が悲鳴をあげた。

「震？うそだよな？嘘って言ってよ。ねえ、さっきみたいに元気に話してよ。震。震ー！ー！ー！ー！」

由梨矢は泣いて呼んだ、私のことを。

「由：梨矢。泣かないではあ、はあ、はあ、泣いちゃ可愛い顔が台無しだよ。」

私は由梨矢が悲しまないようにと笑顔で祈りながら言った。

「震。お願い。しゃべんなくていいからもう、しゃべっちゃダメだ

よ。血が出ちゃうから。」

由梨矢は泣きながら言った。

「何で。そこまでするんだよ。友達に。何で命かけてまで友達を守ったりするんだよ。」

厚樹は怒っているような顔で私に言ってきた。

私はふらふらしながら立ち上がった。

「あんたは、厚樹は自分が助かれればなんだってやっていいなんて思ってるみたいだけど、友達

は金ではかえない。一生のかけがえのない人なんだよ。どんなに自分が傷ついてたって、どんなに自分が苦しんでたって、友達を傷つけてはいけないんだよ！！はあ、はあ、はあ、あんたにはわからないでしょうね。女も、男も、暇つぶしにつかってる最低なやつなんかにわかんないだろうけどね！！！」

ズキッ

「くっ。」

ガクッ

「震？！」

由梨矢は泣きながら心配した。

「大丈夫だよ。」

私は笑顔で言った。

「疲れちゃった。眠っていい？由梨矢、足かして。」

私は疲れ果てて言った。

「うん、いいよ。」

由梨矢は涙をこらえて笑顔で言ってくれた。

「ありがとう。」

私はゆっくり目を閉じた。

私も由梨矢も厚樹も、みんなわからなかった……

私の命は二二で三六

0度回転してしまつこと……

第3話

第三話

私はすぐに病院に運ばれた。

「頭部から大量出血してる中学生一人です！すぐに緊急オペを！先生！」

看護師さん達が大きな声で先生を呼びかけた。

苦しい頭の痛みの向こうから聞こえてきた。

「囊！囊！私待ってるからずっと待ってるから。笑顔で戻ってくる時まで待ってるから、何日でもかけていいから。絶対もとの笑顔のまま帰って来てね？！」

由梨矢の声が聞こえた。

痛みにあたえながら私は笑顔で由梨矢に言った。

「ありがとう。」

私はそう言い残して、手術室に入った。

（お願い、囊、笑顔で戻ってきて！）

由梨矢は祈った。

教室にいた。

みんなも、いそいでかけつけてきた。

ガー…

ドアが開いた。

「どうなってる？ 霰。」

息をきらしながら霰をぶつた人が言った。

「どうなってるですって？！ あなたが、あなたが霰を傷つけたんでしょ？？！」

ガッ

由梨矢は霰を帚でぶつた女の子の制服の襟をつかんで、苦しい顔を近づけた。

「やめろよ。ここで、喧嘩したって、雪道が困るだろう？！」

一人の男子が言った。

そう、その男子はあの、厚樹だった。

「厚樹、あんた、自分が言ってることわかってる？！元はと言えばあんたが原因なんだよ？！返してよ！あの元気だった。霰を返して

よ！！」

由梨矢はつらそうにゆっくりとしゃがみこんでいった。

『……………』

みんなは黙ってしまった。

由梨矢は泣いていた。

ガー…

手術室から先生（病院の）が出てきた。

「先生、震は？ 震はどうなったんですか？！」

由梨矢は必死に落ち着かない様子を隠しながら先生に聞いてきた。

「おちついてください。大丈夫です。息もすっかりしてますし、心拍数も正常です。安心して下さい。」

先生は由梨矢の肩を軽く叩いた。

「よかった。」

みんなは一斉にため息をついた。

「雪道さんのお母様、ちょっとお話が、ちよつとこちらにきてください。」

先生は囊のお母さん達を違うところに案内した。

由梨矢はそのとき嫌な予感が頭の中をよぎった。

窓の外は雪が降っていた。

ちらちら落ちる雪は桜のようにきれいで何かを伝えようとしているのかもしれないと思ってしまふほど切なくて。

苦しい。

由梨矢は窓の外を苦い顔で見ている。

（ねえ、囊、帰って来るよね？。笑顔で、帰って来てくれるよね？）

由梨矢は心の中で何度もこの言葉を繰り返していた。

翌日：

私は病院に入院していた。

お母さんはいつもとちよつとちがくて。

何故か苦しそうな顔を隠していた。

私はすぐにわかった。

だって、十四年間も一緒にいるんですもの、わからないわけないでしょ？

「ねえ、お母さん、何か今日は元気がないね？どうしたの？」

私は元氣のないいつもと変わったお母さんに優しく声をかけた。

「な、何でもないのよ。ちょっと、寝不足なだけ。」

お母さんはつらそうに顔を笑顔に変える。

「そう、それならいいけど。」

私は心配かけないように言った。

だって、泣きそうなんだもん。

お母さんが…。

思ったら私もつらくなった。

ガラッ

急に病室のドアが開いた音に私はビクッとしてしまった。

「失礼します。」

ドアの向こう側から出てきたのはニコツとした顔で入ってきた由梨矢だった。

「どうぞー。」

私は軽く笑顔で言った。

「じゃあ、また来るわね。」

お母さんがガタツと席を立った。

「すみません。」

由梨矢は本当にすみません顔で頭を軽くさげた。

「いいのよ。ゆっくりしてってね。家じゃないけど。」

お母さんは作った笑顔で、由梨矢に言った。

「はい、ありがとうございます。」

由梨矢も、ちょっとだけ、作った笑顔で言ってるような気がした。

「じゃあ。」

ガラッ・ピシャッ。

ドアが開いて一気にしまった。

由梨矢は私のほうに向き直した。

「調子は大丈夫？」

由梨矢は私に心配顔で聞いてきた。

「うん、大丈夫。」

私は元気に顔を笑顔にした。

そして、つけたして、ピースをした。

「よかった。」

由梨矢はホツとしたみたいで、イスに腰をかけた。

「ごめんね。私のせいで。」

由梨矢は苦しそうに顔をしかめた。

「ううん。由梨矢は悪くないよ、変なふうに帛をうけとめたのが悪いんだよ。自業自得ってやつよ。」

私は由梨矢の痛みを少しでも、やわらげてあげたくて、そう…祈りながら言った。

由梨矢はその言葉を聞いて、目をうるませた。

「な、泣かないですよ？ 由梨矢ー。」

私はやわらぐようにやったのに…。

「だって、そんなこと言ってくれるなんて思ってもいなかったから。」

由梨矢は泣きそうになりながら、私に言ってきた。

「あはははは、由梨矢って泣き虫だ。」

私は楽しくするため言った。

「もう、囊のバカ！」

由梨矢は目を手で隠しながら、笑って言った。

そのときの由梨矢は可愛くて、愛しいぐらい女の子で、いいなってちよつとだけ思った。

由梨矢はすぐに泣き止んだ。

「囊、ずっと友達でいてくれる？」

由梨矢は真剣な顔をして、黒く住んだ色の目を私の真正面に向けてきた。

「うん。ずっといてあげる。ずっと、由梨矢の心の側にいつもいるよ。」

私は今までになかったような満面の笑顔で答えた。

「よかった。」

由梨矢はホッとしたような顔をした。

「私は、由梨矢が大好きだから、大丈夫安心して、私が、もし、この星から消えたって、私は

由梨矢の友達だよ。」

私は笑顔で言った。

「私、一番の友達？ それとも、親友？」

由梨矢は私の目をじいーっと見てきた。

「え？親友と一番の友達って同じじゃない？」

私は首をかしげながら私は尋ねた。

「え？あ、そうか。」

（以外に天然？）

「まあ、親友だね。私の一番の友達だよ。由梨矢は。」

私は由梨矢の顔を覗き込んだ。

「よかった！！えへへ。」

由梨矢は照れながら頭かいた。

「かわいいー。由梨矢。」

私は由梨矢をぎゅっと抱きしめた。

「もう、からかわないでよー。」

由梨矢はちよつとだけ笑顔で、怒った。

私達は一時間ぐらい、話をした。

その時間はかけがえのない時間となつて、私の心のアルバムにしまった。

写真みたいに。

綺麗に保管する。

ズキツズキツズキツ…

(い、痛い！)

頭が痛くてたまらない。

痛い痛い痛い痛い…ずっとその言葉が私の頭の中を蝕んでく。

私はナースコールをおした。

たえられない。

ガラッ

病室がのドアが開いた。

「どうしたんですか？雪道さん。」

看護師さんが私に呼びかけた。

「頭…が…痛いんです…うつ。」

ズキズキズキズキ…痛い！！！！

「誰かー！、先生を呼んでー！！！」

看護師さんの声が病院の廊下に響く。

私はなんとか、その言葉は聞こえたけど。

もう、それから、どう運ばれたのか。

どう処置してもらったのかは覚えてない。

ていうよりわからない。

目が覚めたら一日中寝ていたらしい。

「お母さん？」

最初に目にはいったのは、私の手を握り締めていたお母さんだった。

泣きそうなしよっぱい顔をして握り締めていた。

何かを祈りながら。

「あ、やっと目が覚めたのね。」

お母さんは一気に明るくなった。

目がウルウルしていた。

「うん、大丈夫？お母さん、ずっと一緒にいてくれたんじゃないの？目の下にクマができてるよ？」

私はつらそうなお母さんに優しく声をかけた。

「うん、ずっと一緒にいたから。安心して寝てたと思うわ。体調、大丈夫？」

お母さんは顔をちよつとだけゆがめて言った。

「うん、すごく元気だよ。」

私はお母さんに気をつかいながら笑顔で言った。

「そう、よかったわ。」

お母さんは眉毛をちよつとだけよせて笑った。

「また、夕方くるわ。体調がおかしくなったら、ちゃんと看護師さん達を呼びなさい。」

お母さんは、心配そうに顔をしかめながら言った。

「うん。」

私は笑顔で言った。

ガラッ

病室のドアは開き、そして、閉まった。

私は病室で、静かに寝ようと思った。

でも、一日中寝てたからか、全然寝付けない。

しょうがないがら天上の壁をキャンバスと思って何かを描こうとした。

まっさきに出てきたのが：由梨矢の笑顔だった。

「そうだ！いいこと考えた！」

私はお母さんが買ってくれた落書き張を開いて、クラスみんなの笑顔を描いた。

先生の顔も描こう。

みんなを描こう、誰一人ぬけることのないクラスなんだよ。

私はみんなの似顔絵をかいた。

すらすらと手が動いた。

私はそれを完成させた（十五分間の間に）。

私はそれを見て、みんなに逢いたくなった。

この子とはこんなことがあった。

あの子とはあんなことがあった。

全部よみがえって来た。

「みんなー、逢いたいよー。」

私は思わず言葉にしまった。

その時いきなり、病室のドアが開いた。

「!？」

私はビクツとした。

「えへへ、みんなで来ちゃった。」

由梨矢と、クラス全員が入ってきた。

「ちよっ、何？いきなりー。」

私は引きずった顔で、言った。

「あはははは、霏泣いてたみたいだね？」

由梨矢はからかってるように言いながら私の頬のついてる涙をハンカチでふきとってくれた。

「からかってるでしょー。」

私はちょっと怒って言った。

「あはははは、逢いたいって言ってたの誰よー。」

由梨矢はお腹をかかえながら笑った。

「聞いてたのー?!」

私は顔を赤めながら言った。

顔が熱くて熱くてたまらなくなった。

「あはは、顔真っ赤ー。」

「あんた、本当におちよつくてるでしょう?」

私はムカつきながら言った。

「まあまあ、みんなで来たんだから、いろんなこと話そう?」

由梨矢はちょっと笑顔で言った。

「まずは、あやまってもらおうか? 厚樹達?」

由梨矢はちょっと怒りながら言った。

（以外に迫力があるな…）

私は由梨矢の顔を見ながら心の中で思った。

女子五人ぐらいと、厚樹が出てきた。

「ごめんね、霽。」

女子達が言ってきた。

「ごめん。」

あつけない終わりの言葉。

でも、そこもまた厚樹らしいところ。

「暇つぶしにするのは、これでこりた？」

私は首をかしげながら聞いた。

「ああ……。」

厚樹はうつむいた。

「これで、もしかしたらこうなることもあるってことをわかってほしいな。」

私は厚樹の顔を覗き込んだ。

「うん。本当にごめん。」

厚樹は苦しそうに顔をしかめながら言った。

「許すよ。」

私は真剣な顔をして言った。

「ありがとう。」

私と厚樹達と仲直りした。

いっぱい話した。

いろんなこと。

先生も一緒にいて楽しく会話がはずんで楽しい。

もっと話したかった。

でも、もう、こんな機会は無くなってしまっただ。

私は思いもしなかった。

こんなこと……。

第4話

第四話

ガラッ

いきなりドアが開いた。

ドアの外からは病院の先生が入ってきた。

「どうしたんですか？先生。注射の時間じゃないですよね？」

私は聞いた。

「雪道さんのお母様達はもう、知っているのですが。雪道さん自身は知らないことです。みなさんも、知る権利があります。」

私は考えもしなかった。

辛い現実が待ってたなんて…。

「これから、お話することは、一回だけしか言えませんから。私には荷が重くて。雪道さんの脳に脳腫瘍がでています。雪道さんの寿命は、多くても、二ヶ月しかもたないでしょう。」

先生はつらそうな顔をして、私達につらい現実をつきつけてきた。

「そんな。」

私は苦しく何かこみあげてくるものをおさえるみたいに口元をおさえた。

（う、気持ち悪い。）

「すみません、ちょっとトイレ。」

私は病室のベットからおりた。

すたすたすた…

私は思わず吐いてしまった。

（すごく、気持ちが悪い。）

「すみません。急に。」

私はまた、病室にもどり先生の言うことを聞くようなかたちで、病室のベットに座った。

「さつき雪道さんはトイレに行ったけど何でだい？」

先生が私に真剣な目で聞いてきた。

「え？ちよつと気持ち悪くなつて。」

私は正直に言った。

「そう、その脳腫瘍っていうのは頭痛や吐き気がしたり普通ではありえない病的反射をおこすこともあり、手足がしびれたり感覚がにぶくなつていくんだ。つらいと思うよ。私には、すぐ荷が重くて、すぐくつらいんだ。精精後悔しないようにしたほうがいい。」

先生はうつむきながら、私達に話した。

みんなは辛そうな顔をしていた。中には泣きそうな女子達がいっぱいいた。

「みんな、泣かないでよ。」

私は辛そうな顔をしているみんなをはげました。

現実はずらい。

私は先生に現実をつきつけられたときそう思った。

（なんで、世の中って意地悪なんだろう。）

私は泣きそうになった。

「先生、脳腫瘍は手術して、治せないんですか？」

言い出したのはあの、厚樹だった。

「手術は私の手では、百パーセント中、たった、二十パーセントしか確立がないんだ。」

先生は苦しそうな色の目をして、少しかすれた声で言った。

「そんな。」

厚樹はうつむいた。

「うまい人でも、六十パーセントしかないんだよ。一応、手術はできるけど、もっと大きい病院に入院してもらうしかないな。」

先生は深い色の目をして、今にも死にそうなぐらい顔色が悪かった。

「先生、俺の父さんならできるかもしれません。父さんは病院を経営してて、今、由紀元病院のドクターをしているんです。」

厚樹は必死に言った。

「それなら大丈夫かもしれない、由紀元病院では、きっと、道具もそろってるだろうし。たのむよ、君のお父様に相談をしてみてください。」

先生はすぐに明るくなった、多分荷物をおいたんだ。

「はい、がんばって、父さんにたのんでみます。」

厚樹は真剣な目をして言った。

覚悟をきめたかのように。

「大丈夫？厚樹。」

私は辛くて言った。

「何で。お前がこうなったのも俺のせいだし。」

厚樹は自身ありげに言う。

「いや、帚でぶったって言ったね。多分出血したのはそのせいだと思うけど。多分雪道さんのは前からなってたよ。だけど、病院に来るのが遅かったみたいで、もう、手遅れなんだ。」

先生は冷静な目で私達に言ってきた。

「そうだったんですか？」

厚樹は少しホッとしたようにも見えた。

「でも、助けます。」

厚樹は覚悟をきめたように真剣に言った。

私は何故か浮かない顔をしていた。

だって、本当に浮かない気持ちがあるから。

全部、厚樹のお父さんにまかせたら、厚樹のお父さんは責任重大になって、辛いと思う。

「期待なんかさせないほうがいいよ。」

私は真っ黒な目をして言った。

暗闇に落ちたような目をしていたに違いない。

「何言っただよ？お前生きたくねえーのかよ？！」

厚樹は黒くすんだ目を私にむけてきた。

その黒い目は綺麗で、私は目を合わせることができない目だった。

「生きたいよ！！でも、厚樹はよくても、厚樹のお父さんは責任重大なんだよ。医者になんか絶対って文字はないんだよ！！厚樹のお父さんのことも考えてあげなよ。」

私は暗闇に落ちたみたいな目を厚樹にむけた。

私の瞳には厚樹が映る。

「確かに絶対っていう文字はなくても、奇跡っていう文字がある！！」

厚樹は私に少しだけ顔をちかずけた。

必死な目だった。

「じゃあ！奇跡っていう文字に運をまかせろっていうの？！！」

私は泣きそうな目になって必死に言い返した。

だって、死にたくないのなんて当たり前のことじゃん。

なのに…。

「…とにかく、父さんにたのんでみるから、あきらめんなよ。」

厚樹は優しく、私に言った。

「……。」

私は浮かない顔でうつむいた。

「とにかく、厚樹君がお父様にお話してくれるんだね？」

先生が困り顔で私達に言った。

「はい、絶対に話します。」

厚樹はキリッとした声で先生に顔をむけた。

「じゃあ、たのむよ、厚樹君。」

先生は厚樹の肩をポンツと軽く叩いた。

「はい。」

厚樹は真っ直ぐに先生の顔を見ていた。

「じゃあ、失礼。」

先生は少しだけペコリとお辞儀をして、病室を出ていった。

ガラッ・ピシャッ

病室のドアが開きすぐに閉まった。

「じゃあ、そろそろ俺達は帰るよ。」

先生が言った。

「はい。」

私は少し笑みをこぼして言った。

「私はもう少しここにいます。」

由梨矢は先生に言った。

「ああ、いいけど、お前もあんま長くはいるなよ?」

先生が心配そうに顔をしかめながら注意した。

「はい、そうします。」

由梨矢は笑顔で言った。

ガラッ…ピシャッ。

あんまり早くはドアは閉まらなかった。

ほぼ全員が出るのだからそりゃそうだ。

「大丈夫なの？家。」

私は由梨矢に顔をむけながら言った。

「うん、一応、遅くなるとは言っただけだから大丈夫。」

由梨矢は笑顔で私に答えてくれた。

私はちよつと落ち着いて、心がやすらいだ。

「あんな厚樹、見たことなかった。私。」

由梨矢は急に話し始めた。

「え？」

私は首をかしげながら聞いた。

「厚樹があそこまでに必死になってるの、はじめて見た。」

由梨矢は窓の外を見た。

「ふーん。」

私は半信半疑で言った。

「それだけ？」

由梨矢はビックリ顔になって言った。

「え？」

「もうー。」

由梨矢はちよつとだけ怒ったように、言った。

「ごめんごめん。」

私はちよつとだけ笑った。

「厚樹は、多分、本当に囊を助けたんじゃないかな。」

由梨矢はまた、窓のほうをみながら言った。

厚樹を思い出すように遠い目をして。

「何で、そこまで、私のためにしてくれるんだろう？」

私は由梨矢に聞いた。

「教えてくれたからだよ。友達の大切さ。」

由梨矢は私の顔を真っ直ぐに見つめて言った。

「え？」

「だから、前に言ったじゃない。頭から血流してるときに。」

由梨矢の目は少しだけ光っていた。

「あ、あの時の言葉？」

私は首をかしげた。

「それか…好きってことも考えられるわね。」

由梨矢は私にニヤツとして、意地悪そうな顔をして言った。

「もう！からかわないでよ！！」

私はちよつと怒って言った。

「わかんないじゃない。本当かは。」

由梨矢は冷静に言った。

「由梨矢は厚樹のこと今でも、好き？」

私は由梨矢の目を真っ直ぐに見た。

「え？まあ、今でも、好きよ。でも、もう、叶うことのない恋だからいいの。」

由梨矢はまた、窓の外を見つめて言った。

遠くを見るように。

「叶わない恋かー。」

私も窓の外を見つめた。

外には雪がちらちらと降っていた。

「綺麗だね。」

私は由梨矢に言った。

「うん。」

由梨矢は言い返してきた。

私達は少しの間曇った窓の外のを雪を見つめていた。

これからは、あんまりこの景色は見れないかもしれない。

「じゃあ、私も、そろそろ帰るわ。」

由梨矢はイスから立ち上がり、ドアの前に立った。

「また、明日来るね。」

由梨矢は病室のドアのつてをもちながら私のほうに振り返って言った。

「うん、待ってる。」

私は笑顔で言った。

ガラッ・ピシャッ。

ドアが閉まった。

私はもう、少しの時間しかないのか。

私は曇ったガラスを手でふき、窓の外を見た。

雪は降り続く。

でも、私には綺麗に光る蛍のように見えた。

（なんで、私がこんな思い病気になんなきゃならないのよ！）

そう思ったとき目から涙が零れ落ちた。

「ひっ、ひっ、ひっく、ひっく……。」

私は泣いてしまった。

私は夜までずっと泣いていた。

気がつかないうちに朝になっていた。

私は、目蓋がはれて赤くなっていた。

「ひどい顔。」

私は病室の鏡の前に立って、顔を近づけてつぶやいた。

私はずっと寝た。

朝の六時から二時まで寝た。

私は寝てる間、夢を見た。

よりによって私が死んでしまった夢だった。

「ありえない。こんなときにこんな夢見ちゃった。怖い。」

私は腕をさすった。

鳥肌が立っていた。

（なんでよりによってこんなときに。）

ガラッ

病室のドアが開いた。

誰かが入ってきた。

知らない人。

「誰…ですか？」

私はその人に聞いた。

「俺、ここに骨折で入院してる、夜厨喜 貝都。《やずき かいと
《って言うんだ、よろしく。」

黒髪にちょっとだけくせっけがはねてて。

今時のかつこいい人。

「はあ、よろしく…おねがいします。」

私は戸惑いながら言った。

「何歳ですか？」

私は貝都さんに聞いた。

「俺は、十七歳。」

貝都さんは笑顔で言った。

「へえー私十四歳です。」

私はニコツとした。

「君可愛いね。」

貝都さんは綺麗な瞳で、私のほうを見つめてきた。

「そんなに近づかなくても…」

私は顔をひきずりながら言った。

「あ、ごめん。」

貝都さんは頭を手でかいた。

照れてる。

ガラッ

「震ー！大ニュース…だよ。」

由梨矢はいいかけて止まった。

「何で？いるの？お兄ちゃんが…」

これからおこることは……

これもまた、辛い現実だ

ったのです……

第5話

第五話

「何でお兄ちゃんがいるのよ?!」

由梨矢は恐れながら貝都さんを指さした。

「元兄貴にそんな口きいていいのかな?」

貝都さんは怖い顔をしてた。

怖いといっても、何かちがう怖い顔。

(さっきの、貝都さんじゃない。)

私も怖くなった。

貝都さんは由梨矢に近づいていく。

「いや! こないで! 近づかないで!」

由梨矢はすぐくおびえてる。

「元お兄ちゃんに向かって、それはないでしょ?」

貝都さんは止まる気配がない。

私は病室のベットから飛び降りた。

バツ

私は由梨矢の前に立って由梨矢によせないようにした。

「ん？何してんの？囊ちゃん。」

貝都さんは怖い顔をして笑った。

「作った笑顔なんて誰でもわかるわよそんな顔！」

私は思い切って言った。

「ふーん、ばれちゃった？」

貝都さんはまた、怖い顔にもどった。

「怖がつてんじゃないん！！由梨矢が！！！」

私はどかないようにした。

「ふーん、それが？怖がつてる顔由梨矢って本当に可愛いよね？」

貝都さんは私の後ろにいる由梨矢の怖がつた顔を見ながら言った。

「あんたって、人の怖がつてる顔が好きなんだ？」

私は笑った。

「うん好きだけど何か？」

貝都さんは開き直ったみたいに言った。

「そんな怖い顔したって私は怖がらないよ？だって、人を命かけて守れるんだから！！」

私は貝都さんの顔をにらめつけた。

「そうなの？じゃあ、体もかけられる？人を体をかけて守れる？」

貝都さんは舌でかわいた唇をなでた。

（怖い。）

私はちよつと足がふるえた。

ガラッ

「よー、いい話持ってきたぞー。ん？」

病室に能天気な声を出して入ってきたのは厚樹だった。

「何やってんだ？」

厚樹は首をかしげて言った。

「た、助けて厚樹。」

由梨矢がふるえながら声を出した。

「な……にやってんだよ……!!」

ガンッ

厚樹は怒ったみたいで、貝都さんを殴った。

「つてめー」

貝都さんは怒ったみたいに厚樹を殴った。

私は力がぬけてきたからしゃがんだ。

「震。」

由梨矢が私に抱きついてきた。

ギュッ

「大丈夫私がいる。」

私は優しく由梨矢にささやいた。

「怖かった。」

由梨矢は震えた声で私にささやいた。

「うん、私も怖かったよ。」

「何？お前ら恋人？」

貝都さんは私達のことを笑った。

「うせる…」

「あ？」

「うせるっつてんだよ！！」

私はみてないけど、多分この時の厚樹の顔は怖かったと思う。

声をきいていても厚樹の怖い顔がわかる。

「臯月、こっちにこい。」

厚樹は由梨矢を呼んだ。

「うん。」

すたすたすた…。

厚樹に少しだけ隠れた。

「さっさとこっから出てけ！！」

厚樹の声は病室に少しだけ響いた。

「こんなところもう、二度とこねえーよ！」

貝都さんは怒りながら、病室を出ていった。

バンッ

病室のドアを思いっきり閉めた。

「ありがとう。助けてくれて。」

私は厚樹の首にまきつけた手をとった。

「ああ。大丈夫だったか？ 皐月も。」

厚樹は私に少し答えてすぐに由梨矢に言った。

私はちよつとムッとしてしまった。

でも、よく考えたら私は厚樹のことが好きなのじゃないからいいか。

「うん。」

由梨矢はその言葉を聞いて満面な笑顔を見せた。

（うれしそう。）

私はその様子を見て心の中でしみじみと思った。

「ねえ、貝都さんって、お兄ちゃんなの？ 何か元兄貴とか言ってたけど……」

私は首をかしげながら聞いた。

「そ、そんなことはいいじゃん。ねえ、それよりね、いい話があるんだよ……」

由梨矢は何かをかくして話始めた。

「言つてよ、私をたよつてよ。」

私はちよつと泣きそうな顔をかくしながら言った。

「……うん、わかった。」

由梨矢はうつむきながらイスに座った。

厚樹も隣にあつたイスに腰をおろした。

私は病室のベットに腰をかけ上布団を足にかけた。

「私とあの貝都っていう人は兄弟だったの。だけどね、私は信じたくなかったの、なんでかっていうとね。私のことをあの人はいじめるの。いじめるっていったって、子供がやるようなことじゃなくて、その、セクハラみたいなことを毎日されてたの。私、怖くなっちゃって、お母さんにも言ったんだけど、お母さんには表の優しい顔を見せてて、お母さんは私よりも、あの人を信じた。」

由梨矢は腕をさすりながら言った。

その手はかすかに震えてた。

「怖くて、怖くて。私は逃げ出したわ、お母さんはその人のお父さんと再婚してて、お父さんも、怖い、兄と同じ顔だから、いつも笑顔でいるしかなかった、お父さんは顔は同じでも、性格はちがったけど。力にはなってくれなかったわ。ある日私はおばあちゃんにこの話をしたわ、そしたら、おばあちゃんはわかってくれた。この子は私が預かるわって言うてくれて。今はおばあちゃんの家にいる。だから、今は兄にはあつてないけど、まさか、ここで骨折して入院してるなんて…。」

由梨矢は泣き出しそうになっていた。

震えた手、怖がつてる顔、すべてが私にはかわいそうで私は由梨矢の震えた手をギュッと握り締めた。

「私がそばにいるよ。由梨矢、厚樹だっているよ、守ってくれるよ。」

私は、気づいたら泣いてて、笑顔で、由梨矢に言った。

「ありがとう。」

由梨矢は泣きながら私にお礼を言った。

「いつも、一緒に帰ってやるよ。」

厚樹が笑顔で、由梨矢に言った。

「ありがとう。」

由梨矢も泣きながら笑顔を作って言った。

「あ、雪が降ってる。」

私は窓に手をかけた。

桜みたいにちらちらと光って落ちる。

綺麗でしかたがない。

三人で見た雪は美しく、愛しくて、何でか、胸の中に暗い気持ちがある。

「綺麗だね。」

由梨矢は涙をふいて、窓の外を見た。

「すげー。」

厚樹は窓の外を見て、ポカンとした声で言った。

「でさ、何大ニユースって。」

私は由梨矢に聞いた。

「あ、そうそう、厚樹のお父さんが手術をやってくれることになったんだって!」

由梨矢は目を輝かせて言った。

私は厚樹のほうを見た。

「すげーだろ。」

厚樹は指をピース形にして、満面の笑顔をした。

「大丈夫なの？お父さんいって言ってるの？」

私は心配の気持ちでいっぱいになった。

「うん、できるかぎりはするって。」

厚樹は笑顔で言った。

「そう…」

私はうつむいた。

「嬉しくないの？」

由梨矢は私の顔を覗き込んできた。

「嬉しいけど…」

私は深刻な顔をした。

「嬉しいのに何で？」

由梨矢は聞き返してきた。

「ちょっと。」

「また、迷惑掛けたくないって言いてーんだろ？」

厚樹はすごく、早く私の気持ちに気がついた。

「う…ん。」

私は二人の目をそらして言った。

「迷惑なんて考えんな、お前は大事なクラスメートだから、迷惑なんてすきなだけかければいい
いだろ？」

厚樹は私の目をみつめてきた。

「うん。でも、手術をするには、よっぽど技術がないと。」

私は心配な気持ちで言った。

もし、私のせいで、厚樹のお父さんが医者をやめることになった
ら、いやだから。

「大丈夫、俺の父さんはそんなやwana、医者じゃないよ。それでも、
技術はうまいほうのもつとうまいほうのやつだから。安心して父さ
んに命をかけてみな。」

厚樹は優しく私の頭をポンツと叩いた。

あったかかった。

厚樹の手は私の頭の半分ぐらいあつてすごく大きかった。

ごっごっしてた。

本当の男の子って感じの手。

私はよくわからない感情をもってる。

なんでかな、未練なんて残したくないのに。

「じゃあ、そろそろ私帰るね。」

由梨矢がイスから立ち上がった。

「あ、じゃあ、俺も、送ってく。じゃあな。」

厚樹も、いそいでイスから立ち上がった。

「あ、うん、気をつけて。」

私はそれだけ言い残した。

「じゃあね。」

由梨矢はドアのはじっこから顔を出した。

「あ、うん、がんばって、厚樹のこと。」

私は少し小さく小声で言った。

「んな。」

由梨矢は口をぱくぱくしながら顔を赤めた。

「あはは。がばしょ！」

私は手をグウにして、ガッツポーズをした。

「うん。がんばる。」

由梨矢は苦笑いをして、ちょっと笑顔を混ぜて言った。

ガラッ

私は最後まで、人の心配だ。

ちょっと自分で自分にあきれた。

何で、私って、手に入れたものをがしてしまうんだろう？

私は胸が苦しくなった。

窓の外には雪。

ちらちら光りながら降ってく。

愛しい、悲しい、苦しい。

全部この雪にたくそう、よし、かけてみよう。

もし、私が手術をうけるときになったときに雪が降ったら、私は助かる。

そして、ふらなかったら、私は助からない。

「明日、由梨矢に言おう。」

私は泣きながら、笑顔で、窓の外を見つめた。

その頃由梨矢と厚樹は……

「ねえ、いいの？送ってもらって。」

由梨矢は心配そうに言った。

「ああ、大丈夫俺、男だし、金もってねーし、喧嘩なんて楽勝だし。」

厚樹は笑顔で何でもこいって感じで、ポケットの中に手を入れた。

「そう、それならいいんだけど。」

由梨矢はちょっと笑みをこぼして言った。

「じゃあな。」

厚樹は帰ろうとして、振り返ったとき、由梨矢が止めた。

「ねえ、厚樹？」

「何？」

厚樹は振り向いて、聞き返してきた。

「あ、あの、前みたいに、私達……つきあわない？」

由梨矢は顔を赤くしながら言った。

「……わりい、お前を守ってもいいけど、つきあうことはできない、愛し合うことはできない。」

厚樹は真剣な顔で返してきた。

「そ、そう……だね。」

由梨矢は目をそらした。

「ああ。」

厚樹は顔ゆがめて言った。

「ねえ、今言ったことは誰にも言わないでね？」

由梨矢は目を厚樹にむけて言った。

「ああ。わかった。後教えとくよ、俺の好きな人、あいつだよ。」

厚樹はちよこつと顔をだしてるぐらいの雲が入院してる病院を指差した。

「やっぱりね。私わかってたよ、雲が好きなんてこと、あんなに必死な厚樹みたことなかったから。すぐわかつちゃった。」

由梨矢は無理矢理笑顔をつくって、うつむきながら話した。

「やっぱり、わかつちまうだろ。俺顔とかに出ちゃったからだから。」

厚樹は笑顔で少し顔を赤くした、由梨矢の気持ちも考えずに。

「厚樹の好きな人もわかったことだし、家に入るね。」

由梨矢は作った笑顔で家のほうを指でさした。

「ああ、じゃあな。」

厚樹は何気に嬉しそうに話してて、由梨矢は胸がしめつけられた。

ガララ…

「おお、おかえり由梨矢。」

おばあちゃんが由梨矢に優しく言った。

「おばあちゃん、手に入れたいものが手に入らなかったらどうすればいいのかな？」

由梨矢は泣きながらおばあちゃんに問いかけた。

「そうしたら、あきらめるか、あきらめないかのどっちかな。」

おばあちゃんは由梨矢に優しく言った。

「え？どつちなの？」

由梨矢は泣きながら首をかしげた。

「それは、自分の心で決めるんじゃないよ。」

おばあちゃんは胸に手をあてて言った。

「……。」

由梨矢は少し黙った。

「まあ、時間は十分あるから、ゆっくり考えればいいよ。」

おばあちゃんは顔をやさしくしてささやくように由梨矢に言った。

「うん……。」

由梨矢はちょっと浮かない顔をして言い返した。

その頃私はずっと窓の外の雪をずっとみていた。

そのとき、いきなり病室のドアが開いた。

ビクッ

「さつきなぐられた俺だよ。そんなに好きなの？あの厚樹っていうやつのこと。」

入って来たのは貝都さんだった。

「ほつといてください！聞きました、あなたの話。由梨矢からちゃんと聞きました。もう、騙されませんよ！」

私は覚悟を決めた。

絶対にこんな人にまけないって。

「ほう？じゃあ、体でわかったほうがいいかな？」

貝都さんは目を猫のようなするどい目をして、何でもきりさくような目。

私は手が震えてきた。

そうだ、さつきみたいに誰も助けしてくれないんだ。

「あれ？手が震えてるよ？怖いのか？」

貝都さんは私に顔を近づけてきた。

私は目をそらす。

ガッ

貝都さんは私のあごをつかんで自分のほっぺに私をむかせた。

「これ、わかる？さっきあいつがつけた傷、こんなにあかくなっちゃったよ？どうしてくれんだよ！！」

貝都さんは私に怒鳴りつけてきた。

私は黙った。

歯をくいしばった。

ガッ

貝都さんは私の両手をつかんで窓に飛ばした。

（怖い！！誰か！！）

「ん！！！！？」

私は貝都さんにいきなりキスされた。

「ん！！！！！！」

（やめて！！！！）

ゴクッ

私は何かを飲み込んだ。

フラッ

「誰か…助け…て。」

私はベツトで倒れた。

「誰も来るわけないじゃん。」

貝都さんは私が倒れたときにそう言った。

ガラッ

「ん？こんなときに…誰だ…よ？」

貝都さんはドアのほうを振り向いた。

「はあはあはあ。何か嫌な予感がしてきてみたら、やっぱりこんなことか。」

入って来たのは厚樹だった。

「な、何で。お前また。」

貝都さんはあせりはじめてきた。

「もう一発なぐられてーんだな？」

厚樹は黒くしずんだ色の目にして、指をばきばきとならしながら、言った。

「もう、もどるっつの！」

貝都さんは逃げ出した。

「また、こんなにやらせられやがって。いつも、気楽に眠れやしねえよ。」

ギュッ

厚樹は私のことをギュッと抱きしめてくれた。

私はそのときは眠り薬を飲まされてたからしらなかった。

ただ、眠り薬をのまされて夢を見た。

それは、厚樹に抱きしめられてた夢だった…。

あつたかくて、大きくて、私のことを包んでくれる。

ねえ、厚樹、私って厚樹のことが…。

ハッ

目が覚めた。

手があつたかい。

「厚樹？」

私は厚樹の髪の毛を少しだけ書き上げてばそぼそつと言った。

「？あ、おきたか？」

厚樹は眠そうな顔で言った。

「ずっとついててくれたの？」

私は握ってた手を少し強く握り締めながら言った。

「ああ、そうだよ？お前が何か貝都ってやつにやられそうだったから助けて、お前、眠り薬を飲まされてたから。」

厚樹は片手で目をこすりながら言った。

眠そうに。

「ありがとう。家はいいつて言ってたの？」

私は厚樹に言った。

「大丈夫、ちゃんと、今日は帰れないって言ったから。連絡はとってあるから。」

厚樹は私に優しく声をかけた。

「そう、よかった。」

私は片手を胸にあててため息をついた。

ギュッ

私は手をつないでる方の手をちよつと力をこめた。

「なんかあったのか？」

厚樹は言った。

私は横に首をふった。

「私、やっと気づいたの、私、厚樹のことが好き。」

私は思わず告白をしていた。

「あ、今は忘れて、忘れて！」

私はハッとして、首を横にふった。

「忘れられるわけないじゃん。俺はお前のこと好きなのに……」

厚樹は笑顔で言った。

「え？」

「好きだよ。俺も、お前のこと。」

厚樹は顔を赤くして言った。

「ゆでタコみたい。」

私は思わず本音を言ってしまった。

「てめ、人がせつかく告白してるってのに。」

厚樹は力チンときた顔で言った。

「ごめんごめん。うそうそ。」

私は困った顔で言い返した。

「目、つぶって。」

厚樹はいきなり真剣な目で私に言ってきた。

「え？」

「いいからつぶれ。」

「うん。」

私は目をつぶった。

私は口に何かやわらかくて、暑いものを感じた。

（うそ？厚樹と震が。）

由梨矢は口に手をあてながら見ていた。

それは、恋と悲しいことの始まりだった……

第6話

第六話

「……。」

私は黙り込んだ。

「……そろそろ時間だから学校行くよ。」

厚樹は腕時計を見て、言った。

「うん。」

私は笑顔で言った。

「また、学校が終わったら来るから、待ってるよ。」

厚樹はカバンを持って、振り向いて言った。

「うん。由梨矢と一緒に来てね。」

私は満面の笑顔で言った。

ガラッ・ピシャッ

「？何でいるんだ？ここに、由梨矢が……。」「

厚樹はびつくりした顔で言った。

「裏の花あげようと思って、来たんだけど……。」

由梨矢うつむきながら泣きそうな声で言った。

「じゃあ、見てたのか？さっきの……。」

厚樹は由梨矢の顔を覗き込んだ。

コクン

由梨矢は小さくうなずいた。

「そっか……学校、一緒に行こうぜ？」

厚樹は笑顔で由梨矢のことを誘った。

「うん。」

由梨矢はちよつとだけ顔をゆるめた。

私は窓を見た。

今日は雪が降っていない。

私はちよつと不吉な予感がした。

いきなりその痛みはきた……。

「痛い、誰か…。」

私は頭を抱えながら言った。

私はナースコールをおして、看護師さんと呼んだ。

ガラッ

看護師さんが入ってきた。

「どうしました?!」

看護師さんは激しく、言葉を投げかけてきた。

「頭が…痛い…んです。」

私はとぎれとぎれ言葉をつなげた。

「先生を呼びますんで、そのまま、がんばってください。」

私に看護師さんは言葉を投げかけて病室のドクター室につながる電話機をとった。

「六 八号室の雪道さんが頭が痛いと言っています。すぐに先生、来てください!!」

看護師さんは先生にも、何かを投げているように私は聞こえてきた。

私はもつと頭が痛くなつてきて気を失ってしまった。

そこからは私は覚えていない。

ハッ

私は目を覚ました。

「私……ん？」

私は何か手にあつたかい感触を感じた。

「由梨矢。」

私は由梨矢に起きろつと言うように小さくささやいた。

「？」

由梨矢は目をこすりながら私をみた。

「あ、起きたんだ？大丈夫？調子は？」

由梨矢はすこし目蓋がとろりとしていた。

「あのね、由梨矢、私ね？ちょっとかけてみようと思ってね。」

私は由梨矢にちよつと浮かない顔で言った。

「私が手術する日に雪が降つたら、私は助かる、で、雪が降らなかつたら、もう、命はあないって、かけてみようと思って。」

私は頭のかきながら、照れて言った。

「うん、じゃあ、私、雪がふるように祈ってる。」

由梨矢はちよつと浮かない顔。

（何でかな？）

「あのさ、ほかに言うことないの？厚樹のこととか。」

由梨矢はあのことを知ってるかのように言った。

「え？ないよ？何も。」

私は隠してしまった。

「そう。」

由梨矢はちよつとがつくりしたように言った。

「何かあった？」

私はうつむいてる由梨矢の顔を覗き込んだ。

「あのね、見ちゃったんだ。」

由梨矢は私の目をちらちら見つめて言った。

「厚樹と曩がキスしてるところ……」

由梨矢はまたうつむきかえって曇った声で言った。

「うそ。」

私は口に手をのせた。

「ごめん、ひさしぶりに花あげようと思って。そこで、見ちゃって。」

由梨矢は苦しそうな顔に変わっていた。

泣きそうな顔、涙が目にあふれそうに溜まってて、私は苦しくなってしまうがなかった。

「ごめん、うそなんかついちゃって。」

「でも、私、あきらめないことにしたから、私達ライバルってことで。」

由梨矢は今までにみたことのない、怖い顔を私にむけて、つきつけてきた。

由梨矢の目の視線はつきささるいたみを感じるような気がした。

「え？」

私は驚いて目を丸くかためた。

「じゃ。」

由梨矢はその言葉を私の病室に残していった。

「そんな。」

私は思わず言葉にしていた。

私は泣いた、厚樹が来るまで泣き喚いた。

うるさいって言われそうならいかすれている声で、泣き叫んだ。

痛い、心が痛い。

心に折った傷というのは、凄く辛いものだったみたい。

ガチャッ

病室のドアが開いた。

厚樹が入ってきた、さっきあったことを知らないので入ってきたときの声は軽々しかった。

心に折った傷はまだ、ズキズキと痛む。

ズキズキと…ズキズキと…。

「どうした？目、赤くなってるぞ？」

厚樹はうつむいている私の顔を覗き込んできた。

「なんでもないよ。」

私は厚樹に気を使い何も、言えなかった。

「なあ、皐月から、俺に告ったってこと聞かなかった？」

厚樹は思い出すように考えながら言った。

ズキッ

私の心にとがった氷が突き刺さるような感覚。

とがった氷は冷たくて、硬くて、痛くて。

「俺、思い切って言っちゃった、俺は霰が好きなんだって。」

厚樹は何も知らなくて、能天気話している。

痛い、氷が溶けてきたけどさっきおった傷に染み込んで痛い。

「よかった。私も、厚樹が好きだから。言ってくれてたなんて、すごくうれしい。」

私は作った笑顔で、笑って見せた。

きっと、厚樹はそういつてくれるのをのぞんでいる。

私はそうしか考えなかった。

「やっぱり、作った笑顔してる。」

厚樹は私のほっぺを両側とももって、私の目を真っ直ぐにみつめた。

厚樹の目はすんだ黒い色をしていて、綺麗だった。

「ばれちゃった。」

きずかないうちに私は涙を流していた。

涙が一粒零れ落ちた。

ポタッ

一粒病室のベットの上に落ちた。

頬を伝う冷たさは、私の心をもっと苦しく締め付けてきた。

「痛いよ、心が痛いよ。」

私は耐えられなくなり泣き出してしまった。

そのとき、厚樹は私の背中を自分のほうによせて、ギュッと私の体を包み込んでくれた。

あったかい。

気持ちが落ち着く。

私が少し落ち着くまで厚樹は私のことをずっと抱きしめていてく

れた。

私は厚樹の胸を少しおして、離れた。

「ありがとう、やっと落ち着いた。」

私はホッとした顔で、厚樹に言った。

「よかった。」

厚樹は私に笑顔で言ってくれた。

「でさ、ちょっと話したいことがあってさ。」

厚樹は頭を少しかきながら言った。

「実は、囊の手術、明後日になることになったんだ。」

厚樹はつつむきながら言った。

「私はもう、覚悟は出来てるから大丈夫だよ。」

私は真剣そのものの目で厚樹に言った。

「そうか、じゃあ、大丈夫だな？」

厚樹は私の目をちょっとだけ心配しながら言ってきた。

「うん。」

私は顔を真剣な顔にして厚樹に言った。

厚樹は笑顔にもどった。

「また、明日、来るから。」

厚樹は席を立った。

「うん。また明日。」

私は厚樹に手を振った。

ピシャッ

病室のドアが閉まった。

私は歯を磨いて、さっさと寝てしまった。

翌日…

朝、私はぐっすりと寝ていたとき。

耳元で「ピロリロリン」という音がした。

私はびっくりして起き上がった。

「ああー！！！！」

横からつるさく聞こえる声、厚樹の声だ。

「うるさい！！一体何朝っぱらからー。」

私は寝ぼけまなこで厚樹に言葉を投げかけた。

「う、ごめん、起こして、実は寝顔の雲を写メでとりたくて…」

厚樹はしょぼんとした。

「え、じゃ、じゃあいいわよ、とっても、今から寝ればいいでしょ、起きたばっかなんだから。」

私は厚樹に言った。

「やったー。」

厚樹は小さい子みたいにはしゃいだ。

（単純…）

私は心の中でそう思っていました。

私は病室のベットに横たわり寝ているふりをした。

私は唇にちよつとだけ重みを感じた。

私は少し片目を開けた。

私が見たのは、厚樹が私にキスしていた。

「ピロリピロリ」携帯の音になった。

私は目を開いた。

でも、唇の重みはかわらない。

ドクンッドクンッドクンッドクンッ……

私の心臓の音は血管を通して体中に伝っていく。

フワッ

私の熱くなっている唇から、急にさめた空気が唇にふれる。

やっと、厚樹が私の唇から唇を話したんだ。

「いいよ、起きてても霽。」

厚樹は能天気にも目を閉じている私に言ってきた。

「びっくりした。」

私は浮かない顔をして言った。

「あはは、ごめん、ごめん。メールで、友達に送るわ。」

厚樹は自慢をしたくてウズウズにしている。

「やめてよ。恥ずかしい。」

私は顔を赤くして、照れながら言った。

「もう、送信しちゃった。」

厚樹は舌を出していった。

「ああー!!!」

私は厚樹の携帯を手にとって確かめながら大声を出した。

「学校行ったらなんて言われるかな？」

厚樹は能天気な声で私に笑顔で言った。

「すっごい恥ずかしいんですけど!!」

私は厚樹に叫んだ。

「ごめんごめん、まあ、多分今日は客が多いから。じゃ、学校に行ってきます。」

厚樹はイスから立ち上がって逃げ出した。

「ちよつ、まだ話終わってな…」

私は病室のベットから立ち上がるうとしてスリッパをはいて、厚樹をおいかけようとした
ら…

バタッ

私は倒れた。

足にうまく力が入らない。

「う…そ…でしょ？」

私は足を見た。

まひしてる。

「そんな、じゃあ、もう、外で歩けないの？」

私は口に手をあてて泣き出した。

冷たくて固い病室の床にポタツと一粒涙が零れ落ちた。

「何だよ…何で私なのよ！！！！！」

私はふいてもふいても落ちてくる涙をふきながら、ずっと喚いた。

誰か、私をこの世から救って……

私は泣きながらそう思った……

第6話（後書き）

次回、最終話です。

第7話（前書き）

ついにきました最終話！！！！
みなさん、気に入っていただけるとすごくうれしいです。

第7話

最終話

私はまひしてうあごかない足をなでた。

「何で、動いてくれないの？」

私はまひして動かない、情けない足に聞いてみた。

当然足は何も言わない。

あたりまえ。

足がしゃべるなんて聞いたこともない。

あるわけがない。

けど、私はそのときだけしゃべってほしいと心から願った。

あるわけないのに。

「私は救われないのよね。結局は何も、生きてる価値なんて私にはないのよ。」

私は自分勝手にずっと言った。

言い聞かせるようにずっとこの言葉を繰り返した。

なにも、ない病室。

真っ黒なテレビ。

涙でいっぱい目。

苦しくなる心。

この言葉を繰り返すたび胸が締め付けられて苦しくなる。

私は悪いことなんかしてないよ？何で私をこんなにしたの？神様
って、意地悪だね。

私をこんなにするなんて。

不公平だよ。

私は心の中でも、こんなことを考えていた。

結局、神様なんていないんだ。

私は運が悪いんだ。

だれも、助けられないこの病気、奇跡でもおきないかぎり私は助
からないんだ。

「誰か、助けて…」

私は再び泣き始めてしまった。

私は一時間ぐらい泣いていた。

ガラッ

十分ぐらいして、病室のドアが開いた。

看護師さんが入ってきた。

「注射をしにきました。」

看護師さんはいつもの看護師さんだった。

「はい。腕まкруうね。」

看護師さんはいつもやさしい。

顔が美人で、スタイルよくて、いかにも看護師さんで、いつも、私の注射を担当している。

男は一気にホレちゃいそうな性格って感じ。

でも、それは表の顔で、裏は絶対違う。

「はい、終わりました。」

看護師さんは顔を笑顔に変えて綺麗にみがかれた白い歯を見せる。

「ありがとうございました。」

私はまくったパジャマのそでを直しながら言った。

「いいえ。」

ガラガラガラ…

ピシャッ。

看護師さんは人事のように病室を出て行った。

あの笑顔だって、人事。

結局自分の担当だから。

私は全部考えることがマイナスになっていった。

そのたびそのたび胸が苦しくなった。

考えることが全部マイナスなんてなったことがなかったから。

辛くなった。

私はもう足が動かなくなったことで見るものの全部が絶望に変わった。

また私は泣き出した。

私は三時ぐらいいまで泣いていた。

こんなに泣いたのは初めて。

昔は私は泣き虫なんかじゃなかったのにな。

私は一瞬そう思い出した。

ガラッ

「もう、いいよ。そんなに辛いことなんて考えないでよ。」

由梨矢がいきなり泣きながら病室に入ってきた。

「由梨矢。何で？学校は？」

私は涙でいつぱいの目で由梨矢を見た。

「学校は休んだ。てゆうかサボリ。」

由梨矢は泣きながら笑った。

「え？なんで？」

私は由梨矢に尋ねた。

「ずっと外から見てた。厚樹と雲がキスしてるところから。」

由梨矢は泣きながら落ち込んだ。

「ずっと雲が苦しんでるところをずっと見てた。涙が止まらなかった。」

由梨矢は涙をこぼしながら私の手に手をのせてきた。

「私はずっとみてきたよ。雲が傷ついてるのを、ずっと見てきたよ。泣いてるのを見てきたよ。ごめんね、昨日はごめんね。」

由梨矢は泣きながら言った。

「大丈夫だよ、昨日のことはなしにしてあげるから。心配してくれてありがとう。」

私は泣きながら由梨矢に優しく言った。

「ごめんね、ごめんね、ごめんね―」

由梨矢は泣いて私にあやまった。

「いいんだよ。」

私も泣きながら、由梨矢のことを許した。

「ありがとう。」

由梨矢はその言葉を残して私の病室のベッドに顔をつけて泣いた。

私も一緒に泣いた。

声がかかるまで。

目が痛くなるまで。

息が苦しくなるまで。

ずっと、泣いた、由梨矢と一緒に。

泣いて…泣いて…泣いた…。

私と由梨矢はもう、涙が出なかった。

ぼーっとしていた。

何も考えずに。

ガラッ

いきなりドアが開いた。

入ってきたのは、厚樹とクラスメートの男子と見たことのない男子達だった。

「よっ、こいつらがどうしてもっていうから連れてきちゃったよ。」

厚樹は顔をニヤニヤさせながら言ってきた。

「ん？目、赤くなってね？霰。」

厚樹は泣いてて赤くなった目を見つめてくる。

「大丈夫。」

私は厚樹の視線をそらしながら言った。

「臯月もじゃねえか。大丈夫か？」

厚樹は由梨矢の目を少しだけ見つめて言った。

「大丈夫だよ。心配しないで、厚樹は雲の彼氏なんだから、私にそう言ってるって雲が怒るよ？」

由梨矢は髪をすこしかきわけて言った。

「そうか？それならいいんだけど。」

厚樹はちよつと考えているように言った。

「おおーこの子が厚樹の彼女？可愛いー超可愛いじゃん！俺持ち帰りてー！」

知らない男子が私に抱きついてきた。

「ちよつ、雲に触るなよ！」

厚樹はいそいでその知らない男子を引き離れた。

「雲ちゃんっていうんだ。可愛いね。」

もう一人の知らない男子が私に声をかけてきた。

「ありがとうございます。大げさすぎですよ。」

私は少し、落ち着いて知らない男子達に言った。

「いいなー。こんな可愛い子ー。うばいてー。」

知らない男子の私に抱きついてきた男子のほづが言ってきた。

（まだ言うか…。）

私は心の中でそう思った。

「ありがとうございます。」

私はいやいや声を出した。

「それにしても、お前らが付き合つとわ思わなかったよ。」

クラスメートの男子が言ってきた。

「そう?。」

私は疲れげみに言った。

「うん。メール見たときはびっくりした。」

クラスメートの人がまた言ってきた。

「ああ、今朝のメールか。女子達には言ってないよね?。」

私は厚樹に聞いてみた。

「ああ、女達には送ってないけど。」

厚樹は言った。

「そう。」

私は元気なさげに言った。

「で、その隣の子は？」

知らない男子達由梨矢のことを指でさした。

「ああ、皐月由梨矢って言って、俺の元カノで、雲の親友。」

厚樹は軽々しく説明した。

「へー、お前、どっちも可愛い子とりやがってー。うぜー。」

知らない男子達が厚樹をせめる。

由梨矢はちよつと浮かない顔をしている。

「大丈夫？由梨矢。いやでしょ。言われるの。」

私は小声で由梨矢に言った。

コクンッ

由梨矢は小さくうなずいた。

一回だけ、柔らかく。

私は由梨矢の頭をポンツと軽く叩いた。

「ありがとう。」

由梨矢は小声で私にお礼を言った。

私達はしばらく厚樹達の楽しそうなところを見ていた。

遠い目で。

遠くを見るように。

だって、何故か、遠くに見える。

あんなふうに私は楽しむことができないから。

ポタツ、ポタツ、ポタツ…

私はまた泣き出してしまった。

「霽。」

由梨矢は私の心の声がわかっていているみたいに私の手を握ってきた。

「何でかな？何で？私がこんなめにあわなきゃなんないのよ。」

私は厚樹達に聞こえないよう小声で由梨矢だけにこの気持ちを伝えた。

「大丈夫だよ。私がいる。」

由梨矢は私が泣いてるのを隠してくれた。

そして、優しく言ってくれた。

神様なんていない。

この世にいないんだ。

手術当日…

私は朝早くから起きてしまった。

私はテレビをつけた。

天気予報を見た。

「今日は雪などはふらないでしょう。」

私は心にグサツと傷ができた。

頭の中を駆けめぐった。

「うそ…でしょ？うそでしょ？そんな…！」

私はテレビに近づいた。

涙が出てきた。

今日の手術は……失敗……？。

ガラッ

由梨矢が入ってきた。

「こんな朝早くにどうしたの？」

私は涙をふきながら言った。

「どうしたのじゃないわよ。どうするの？」

由梨矢も心配して朝早く起きちゃったみたい。

「どうするも、こうするも、厚樹のお父さんにまかせる。」

私は泣きながら言った。

「そう……そうしかできないもんね。私は雪が降るように願ってみる。」

由梨矢はそう言って、イスに腰をおろして。

私の手をギュッと握り締めた。

「ありがとう。」

私は笑顔で由梨矢に優しく言った。

私と由梨矢はずっと手を握り締めていた。

「死んでも、親友でいてね。」

私は由梨矢に泣きながら言った。

「うん。ずっと、親友だよ。」

由梨矢は私に優しく言ってくれた。

「ありがとう。」

私は由梨矢に言った。

ガラッ

「そろそろ移動するわよ。」

お母さんが病室に入ってきた。

真剣な目。

きりつとした背筋。

すごくお母さんとは思えないほどシャキッとしていた。

「うん。」

私もまけないようにシャキッとした。

ガラッ・ピシャッ

病室のドアは閉まった。

私は病院を出た。

タクシーに乗り込んで由梨矢にバイバイをした。

「後で、行くからね。」

由梨矢は笑顔で言った。

「うん。待ってる。」

私は手をふりながら言った。

「じゃーねー。」

由梨矢も手を振ってくれた。

「じゃねー。」

私も手を振ってからタクシーが動き始めた。

これから私は運命の分かれ道にたどりつく。

どっちなんだろう？私の運命は。

生きれるのか、死ぬのか、どっちなんだろう？

厚樹のお父さんの病院についた。

「よう。」

厚樹が待っていた。

「厚樹。」

私は抱きついた。

「どうした？今日は一段と女の子らしいじゃんか。抱きついてくるなんて。」

厚樹は私にむかって言った。

「だって、最後になるかもしれないじゃん、だから。」

私は笑顔になって厚樹に言った。

「最後なんて言わせねえぞ。俺の父さんに頑張ってたのんだから、父さんは絶対助けてくれる。」

厚樹は私に覚悟を決めたみたいな顔で言ってきた。

「そうかな？」

私はいやなふうに厚樹に言った。

「ああ。絶対だ。まけそうになってもまけんなよ?」

厚樹は私のおでこにデコピンをした。

「いて。わかったよ。がんばるよ。」

私は泣きそうになつて顔を隠しながら言った。

「ちょっと、二人だけの世界になんないでくれる?」

後に由梨矢とクラスメートの全員がいた。

「みんな。来てくれたんだ。」

私は明るくみんなに笑顔を見せた。

「がんばって。霽!」

由梨矢は私にむかってガッツポーズを見せてくれた。

「うん。」

私はきらきらさせた目を由梨矢にむけた。

由梨矢が心配しないように。

自分では辛い気持ちがいっぱいあった。

自分は怖くなった。

でも、由梨矢達に心配させたくない。

「がんばっていつてくる。」

私は診察室に入った。

私は診察室に入って、診察をしてもらい。

病院のベットになっところがつて麻酔をうつてもらい。

手術室に入った。

私は眠っている。

でも、何かしら思いが私の頭に飛んできた。

頭の中をかけめぐっている。

その言葉は由梨矢と厚樹という言葉だった。

由梨矢、厚樹、私は絶対に戻ってくるよ。

絶対に。

だって、こんなにいっぱいの人が私のことを応援してくれてるんだから。

その頃由梨矢達は…

「霽、大丈夫だよな？まさか、死んじやったりしないよね？」

クラスメートの女子が一人言ってきた。

「そんなのあるわけないじゃん！絶対に戻ってくる！！霽は絶対に帰ってくる！」

由梨矢は病院に声を響かせる。

「そつだよ、俺達が応援してやんなくちゃ意味がねえじゃんかよ！！」

厚樹は真剣に言った。

「そうだね。何のために来たんだかわからなくなっちゃったね。」

女子一人が言った。

「応援するぞー！！」

厚樹が大声で言った。

『おおー！！』

みんなの声がたちまち病院の中に響いた。

手術室にもこの声は響いた。

「がんばるんだよ、雪道さん。絶対、元気に戻ってくるんだよ！！」

先生こと厚樹のお父さんは私に投げかけた。

私に応援の声を。

聞こえるよ、みんなの応援してる声。

私はずっとその言葉を繰り返して聞いていた。

いろんな思い出があったな！。

もっと、作ろう。

いろんな思い出を。

その頃由梨矢達はというと…

由梨矢は窓を見て何かを願っていた。

（お願い。雪降ってよ！お願い、雲が助かるように。）

「何祈ってるの？」

厚樹が由梨矢に聞いた。

「雪が降るように。」

由梨矢は窓の外を見ながら厚樹に答えた。

「何で？」

厚樹は由梨矢に首をかしげながら聞いた。

「雪が降れば霰は助かるかもしれないの。」

由梨矢は願いつつ厚樹に答えた。

「どうゆう意味？」

厚樹はきいてくる。

「しつこいな。しょうがない。あのね、今、霰がかけしてるの、雪にいっぱい思い出があつて、雪がふれば助かる、雪が降んなければ助からない。そう、かけしてるの、私は助かるように雪が降るように願ってるの。」

由梨矢は窓の外を見ながら願い続けた。

「わかった。俺も願う。」

厚樹も窓の外を見て願った。

雪、降って。

雪、降って。

雪、降って。

雪、降って…

「うそ?!」

由梨矢は窓の外を見て驚いた。

「マジで?!」

厚樹も窓の外を見て驚いた。

驚くのもあたりまえ、だって、本当に雪が降ってるんだもの。

「今日は晴れって言ってたのに。すごい。助かるかもしれない、霽。」

由梨矢は目をウルウルさせて言った。

雪は桜みたいにチラチラと落ちていく、キラキラと光ながら。

ゆっくり、落ちていく。

私は聞こえたような気がした。

何がって?それはね、由梨矢と厚樹の声だよ。

きっと助かるよ!って、由梨矢と厚樹が私に言ってくれたような
きがしたの。

いや。

絶対に言ってくれた。

たちまち光が差し込んできた。

「ん？」

私は目を開いた。

「起きた！起きたよ、みんな！雲が起きたよ。」

聞こえてきたのは由梨矢の声。

みんなを起こす声。

「よかった。雲、生きれるよ。」

由梨矢が泣きながら、私に言ってきた。

「私、助かったの？」

私は信じられないことを言われて、びっくりしながら聞いた。

「うん。助かったんだよ。生きれるんだよ？！」

由梨矢は涙をふきながら笑顔になって言った。

「生きれるんだ。生きれる。」

私は涙があふれ出た、泣いてしまった。

「よかった。」

みんなまで泣き出してしまった。

でも、私は生きれるようになった。

手術は成功。

厚樹のお父さんは私の難しい手術を成功させて、医者のランクが上がった。

厚樹のお父さんは有名になった。

その後中学三年になり、厚樹は医者をめざして、勉強中。

あんまりデートはできないけど、いつも、勉強は厚樹と一緒にや
ってるから、あんまりつまらなくはない。

一生懸命な厚樹を見てるとなんだか楽しくなる。

私もちよつとだけ高いランクの高校を目指している。

だから、いつも一生懸命勉強をしている。

由梨矢は今彼氏と同姓しているでも、ちゃんと勉強はして高校は
行くらしい。

今は彼氏さんと仲よさげだとか。

メールのやりとりはしている。

時々あいに行く時はあるけど。

すごくたのしそう。

私達は明日へとがんばって生きている。

みんな人それぞれ生きていく。

そして、いろんな道に進んでいく。

バタバタバタバタ…

私は二回におりていく。

「お母さん、行ってきました。」

ガチャッ

私はドアを開ける。

ドアの前には厚樹がいる。

みんなも、将来の扉を開けていくんだ。

第7話（後書き）

読んだついでに感想も書いてくれるととてもうれしいです。
てゆうか書いて！！
とゆうことで・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5173c/>

雪

2010年11月5日14時32分発行